

# 「フランシタン」についての考察—アンケートの分析をもとに Un agach sul “francitan” - Una enquèsta brèva

佐野直子

SANO Naoko

はじめに

言語接触は、あらかじめ設定された二つの言語が「あるべき姿」から崩れてしまった状態とみなされる傾向が強い。それは個人の一過性の「借用」ないし「混用」として、または言語共同体どうしの言語コンフリクトの過程で起こる忌むべき状況として、さらにはある言語の地方変種の安定した状態と見なされてきた。これらの視点は、すべて<一つの言語> (数えられる、固定した体系を持った) のア・プリオリな存在を前提としたものである。

オクシタン語のような「消滅しつつある」というある種の「言語接触」の形でしか姿を現せない少数言語の場合、「言語接触」を対象化することは<一つの言語>としての存在を記述するために根源的な重要性を持っている。しかしその一方で「言語接触」の対象化は、「二」言語の接触、というようにその分割が明示できるもののみを可視化し、あたかも<一つの言語>があらかじめ存在しているかのように書き出してしまふ。「言語接触」という対象は、二つの言語に分割して分析するだけでなく、揺らぎつつも豊かな「日常の人々の会話」そのものとして記述することも重要ではないだろうか。

本論文は、「フランス語とオクシタン語 (occitan) の接触形態」と定義される「フランシタン (francitan)」について論じ、フランシタンのいくつかの単語について行ったアンケート調査を通して「言語接触」の問題を考察したい。なお、本論文は1999年5月に行われた第37回ロマンス語学会における発表原稿に訂正・加筆したものである。

## 1. 「フランシタン」とは何か—「言語接触」の記述

まず、「フランシタン」という概念=対象について簡単に説明しておきたい。

“francitan”とは、フランス語とオクシタン語の接触形態を示すために70年代から使用されるようになった用語である。<sup>1)</sup>しかし、「フランシタン」という名称それ自体は非常に新しいが、「フランス語とオクシタン語の接触」それ自体の歴史は古い。Gardyは、「フランシタン」は、南フランスにおいて、16世紀にフランス語が公用語として導入されて以来現在にいたるまでの、長期にわたってある程度安定して存続した言語の状況であるという結論を出している。<sup>2)</sup>しかし、このような接触形態は、フランス語の南フランスにおける定着と、その一方で「オクシタン語」という<一つの言語>が成立する過程で、たびたび「問題視」されては忘れ去られることを繰り返してきた。<sup>3)</sup>

「フランシタン」が記述の「対象」として改めて姿を現すようになったのは、カタルーニャの社会言語学の隆盛をうけたオクシタン語社会言語学者が「フランシタンの回帰<sup>4)</sup>」を提言するようになった70年代以降である。オクシタン語とフランス語の接触形態は、「地域フランス語」「南仏訛り(Accent

du Midi)」など、「フランス語の変種」という文脈でとらえられている一方で、オクシタン語の存在を信じ、それを対象とする言語学者にとっては、オクシタン語の「衰退」の象徴とみなされていた。<sup>8)</sup>しかし、「フランシタン」という名称によって「名付けえないものを名付ける」<sup>9)</sup>ことで、南フランスの現実の言語活動を積極的に「言語接触」としてとらえ、もはやほとんど話されなくなっているオクシタン語の痕跡をその中に見いだそうという姿勢が示されるようになった。「フランシタン」はオクシタン語とフランス語の diglossie (ダイグロシア、社会的二言語併用) 状態の中で生じる言語接触の「連続体」として、また、オクシタン語の現状をしめす唯一の調査の対象として、オクシタン語社会言語学研究における中心的なテーマの一つとなった。

そもそも「フランシタン」を対象化するという問題は、オクシタン語話者人口の減少・話者の「恥の感覚 (vergonha)」などによって、「オクシタン語」そのものが分析対象として現れないという困難から生じたものである。<sup>7)</sup>歴史的にも、オクシタン語研究においては、フランス語との類似性によって、むしろ「どこまでが(純粋な)オクシタン語か」という問いが重要であった。<sup>8)</sup>「フランシタン」が対象として認識されるようになってからも、その研究の主眼は「フランシタン」とオクシタン語の関係であり、そこからオクシタン語という<一つの言語>を再構築することにあった。<sup>9)</sup>

その一方で、あらかじめ「二つの言語」に分割されるために設定された「フランシタン」は、その対象化の過程で「フランス語とオクシタン語の混合」というよりも、「フランス語でもオクシタン語でもない」姿をかいま見せることがある。これらの話しことばはどのように使用されているか、以下のアンケート調査から分析する。

## 2. アンケート調査の分析－「接触」の現状

### 2-1. アンケートの概要

場所: モンペリエ第3大学のキャンパスにあるカフェ

日時: 1997年5月23, 24日

対象: カフェに来た人 135人を無作為抽出

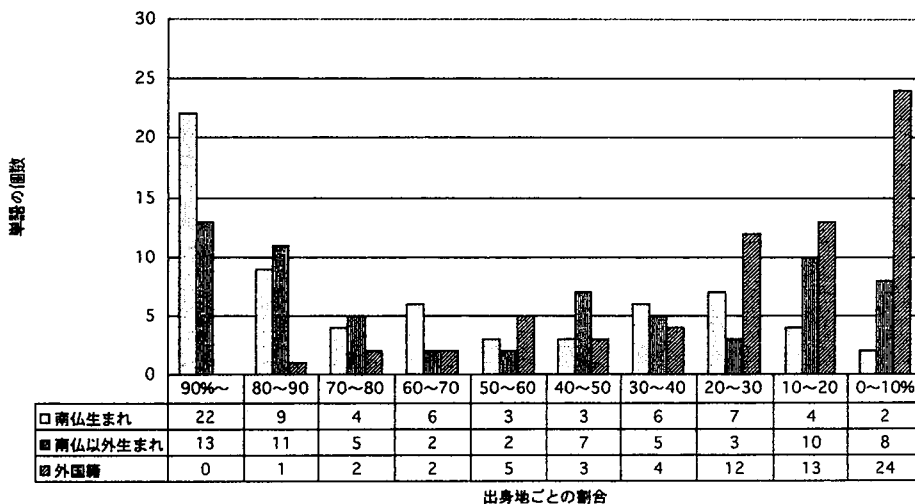
南フランス生まれフランス人	56人
南仏以外生まれフランス人	48人
外国人	17人
不明	14人

内容: Boyer によって選択された 66 個の単語 (表記法はフランス語のそれに準じる)<sup>10)</sup> について、その単語を知っているか、どんな意味か、を書いてもらう。アンケート用紙にはこれらの単語がオクシタン語、または「土地のことば」であるとは表示していない。アンケートの内容は以下の通りである:

1. Avez-vous entendu ces mots?                          oui                  non
2. Savez-vous ce qu'ils veulent dire?                  (    )

assuquer, bader, bartas, bisou, bougne, bougnette, bouléguer, bouvine, bramer, bugue, cabourd, calinou, caraque, carpan (virer un), casquer, castagne, castagner, closque, coufle (être), cramer, croustet, embroncher (s'), empéguer, ensuquer, escagasser, escamper, escaner, escoubilles, esquicher, esquinter, fada, fangue, finter, frisquet, gafet, gavach(e), guincher, languir (se), menotte, morfler, pécaire, péguer, peillarot, peille, pesoul, pétasser, pétoche, pitchoun, pitchounette, poutou, quicher, rabaler, ratoune, récater, resquiller, rondiner, rouméguer, roupiller, rouscailler, rousiguer, rouste (la), sadoul, sanquet, tabasser, trempe (être), tuster

グラフ1: 出身地ごとの聞いたことがある単語の割合



2-2. 質問1: 「これらの単語を聞いたことがありますか？」

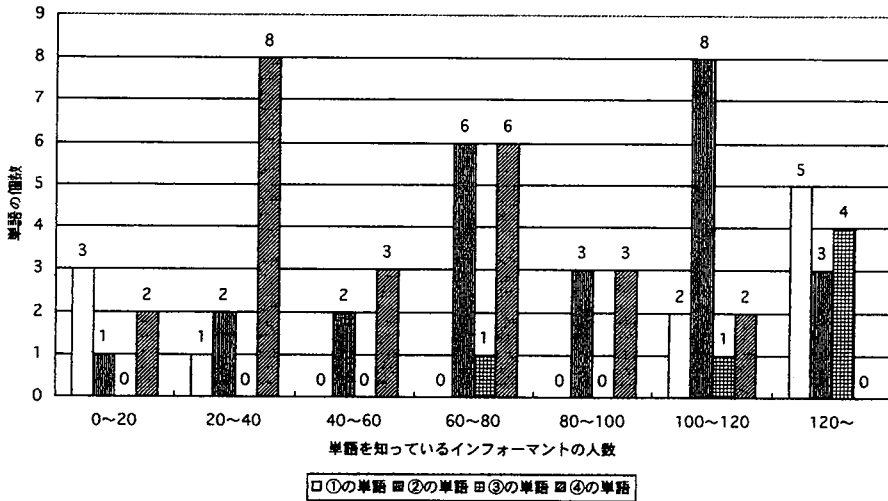
アンケート実施場所は文学部の大学のカフェで、オクシタン語からもっとも疎遠であると見なされる「都市の」「高学歴の」「若い」「女性」が多いところでもある。<sup>11)</sup> その分年齢層と性別には大きな偏りがあり、回答において年齢差、性差については有為な差は見いだせなかった一方で、出身地別についてはかなりはっきりとした差が現れた(グラフ1参照)。

また、単語ごとの知っている人数について見ると、インフォーマントのほとんど全員が知っている単語から、ほとんど知られていない単語まで大きなばらつきが観察された(グラフ2参照)。同時に、出身地別に見た場合、その知っている割合の差にも大きなばらつきが見られた(グラフ3参照)。これらの傾向と単語の意味との関係は、次項2-3で詳述する。

2-3. 質問2: 「それらの意味を知っていますか？」

質問2の回答で得られたフランス語による言い換えを、フランス語の辞書、オクシタン語・フランス語の辞書、「フランシタン」の語彙集に照らし合わせて分析したところ、対象となった単語に以下の4つの傾向が認められた。

グラフ2：単語の意味の分類とその単語を知っている人数の関係



①単一の意味 (11 個 : assuquer, carpan, cramer, esquinter, fada, fangue, péguer, pésoul, pétoche, roupiller, trempe)

90%近くの人が「聞いたことがある」と答えた単語については、以下のように意味を書かせると出身地にかかわらずほとんど全員が同じフランス語の単語で言い換える場合が多く見受けられた。

cramer (128) - brûler      esquinter (123) - abîmer      fada (126) - fou      péguer (103) - coller  
 pétoche (121) - peur      roupiller (123) - dormir      trempe (104) - mouillé

しかしその一方で、同様の傾向は、ほとんどの人が知らなかった単語、たとえば assuquer (11) - assommer      carpan (13) - gifle      fangue (20) - boue      pésoul (23) - poux にも見受けられる (グラフ 2 参照)。これらの単語の場合は、伝達される機会自体が非常に少ないため、使用される人々の間では意味が固定されていることが推測される。

②翻訳が難しい単語 — 「オクシタン語」の再構成 (23 個 : bisou, bouvine, bramer, calinou, coufle, ensuquer, escaner, esquicher, frisquet, languir, morfler, pétasser, pitchoun, pitchounette, poutou, quicher, resquiller, rouméguer, rouscailler, rousiguer, rouste, sadoul, sanquet)

ニュアンスは単一でも、それを「フランス語に言い換えるのは難しい」単語は、フランス語によるほぼ固定したいいかえができる単語よりはるかに数が多い。このような傾向の単語は、知っている人数、地元生まれとそれ以外の知っている割合の差にかかわらずほぼまんべんなく見受けられる。これらの単語をフランス語に言い換えるにあたっては、以下のような傾向が認められる。

・かわいらしさ、愛情表現(“petit”, “affectif”など)を示す修飾語によって説明される単語

— bisou, calinou, frisquet, poutou, pitchoun, pitchounette

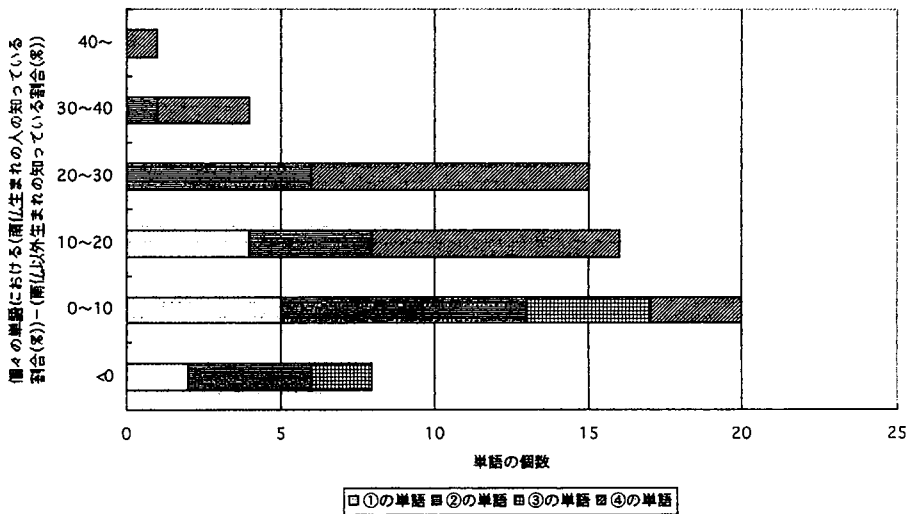
・激しさ、強調(“très fort”, “violemment” など)を示す修飾語によって説明される単語

— bramer, ensuquer, rouscailler, la rouste

- ・数多くのフランス語の同義語を併記し説明される単語 — coufle, escaner, languir, morfler, pétasser
- ・具体的な様相を示して説明される単語 — bouvine, resquiller, rousiguer, sanquet

これらの単語は、「フランス語では表現しきれないニュアンスをオクシタン語によって補う」ために使用されていると解釈できる。この「より愛着のある表現である一方、大げさで滑稽な、または粗野な表現」「文脈依存的な、その地域の文化と結びついたことば」という特徴・価値は、<一つの言語>としてのオクシタン語、さらには「少数言語」一般においてしばしば言及される特徴・価値と一致している。

グラフ3：南仏生まれと南仏以外生まれの単語を知っている割合の差



③多義語—「フランス語」との差 (6個 : casquer, castagne, castagner, guincher, menotte, tabasser)

「ニュアンスの違い」だけではなく、あきらかに多義的な単語もある。フランス語の辞書、オクシタン語の辞書、「フランシタン」の辞書を調べた場合、同じ単語でも辞書によって異なる意味が記されていることは珍しくない。Le Petit Robertでは、今回調査した単語のうち25個が見出し語となっていたが、そのうちオクシタン語、またはフランシタンの辞書と異なる意味が掲載されていたものは11個あった。そのうち上記6個の単語は、よく知られており、また「出身地別」の知っている割合の差はほとんどないことが特徴である(グラフ2、グラフ3参照)。これらの単語の質問2の回答では、フランス語の辞書に掲載された意味と、オクシタン語の辞書に掲載された意味が混在している。

出身地によってどのような意味を書くかに一定の傾向が認められる場合もある(下記例1参照)。例えば知っている率が非常に高かった castagne については、オクシタン語の代表的な辞書 Alibert では「栗」という意味が記されている。しかし、フランシタンの語彙集や Le Petit Robert においては、「げんこつ」などという意味になっている。「地元以外」では、「栗」の意味を書く人はほとんどいなかった。

た一方で、「地元」のインフォーマントは、少なくともももとは「栗」の意味だったのだ、と知っている人が多く、両方の意味を書いた人の中には、そのことを指示する人が3人いた。また、guincherについては、*Le Petit Robert* に記された意味である“danser”、そこから派生したと考えられる“faire la fête”の意味が、「地元以外生まれ」で圧倒的に示されているのに対し、「地元生まれ」の回答では *Alibert* に記された意味である“regarder”とそこから派生した“draguer”がよく表示された。一方、tabasser と menotte においては、出身地別に見て *Le Petit Robert* に記された意味を記入した人数にほとんど差が認められなかった。

例 1: ③の単語の意味の回答例 (出身地別の回答者の人数表)

\* ROB:*Le Petit Robert*, 1996

ALI: *Alibert, L., Dictionnaire occitan-français selon les parlers languedociens*, IEO, 1966

FPO: *NOUVEL, A., Le français parlé en Occitanie*, Editas Montpellier, 1978

FRL: *CAMPS, C., Dictionnaire du français régional du Languedoc*, Editions Bonneton, 1991

casquer(121) - ROB: *payer, donner de l'argent*

ALI(cascar): *frapper, heurter, choquer, tomber, couler...*

FPO: *prendre des coups, se faire frapper*

casquer	外国人	不明	南仏	南仏以外	合計
“payer cher”	3	10	36	36	85
“se faire mal”	1	1	14	6	22
“frapper”	0	0	2	1	3

castagne(123) - ROB: *coup de poing, la bagarre*

ALI(castanha): *châtaigne*

FPO: (1) *châtaigne (celle qu'on grille)*, (2) *coup de poing*

castagne	外国人	不明	南仏	南仏以外	合計
“bagarre”	4	6	29	31	70
“coup”	0	7	26	17	50
“châtaigne”	0	1	9	2	12

guincher(64)- ROB: *danser*

ALI(guinchar): *lorgner, guigner, viser, regarder d'un seul œil*

guincher	外国人	不明	南仏	南仏以外	合計

“danser”	0	4	15	14	33
“faire la fête”	0	1	1	10	12
“regarder”	0	3	5	0	8
“dragner”	1	0	1	0	2

menotte(128) - ROB: *main d'enfant, petite main, (au pluriel) entraves, bracelets métalliques réunis par une chaîne et munis d'une serrure qui se fixent aux poignets d'un prisonnier*

FPO(menote) : *main petite (enfant, etc),*

menotte	外国人	不明	南仏	南仏以外	合計
“petite main”	2	8	26	24	60
“main”	1	4	22	17	44
“bracelets de police”	9	1	12	6	28

tabasser(128) - ROB: *(familier)battre, rouer des coups, passer à tabac*

ALI(tabassar) : *frapper bruyamment, battre à coups redoublés, cogner*

tabasser	外国人	不明	南仏	南仏以外	合計
“frapper”	5	6	33	30	74
“battre”	1	3	13	11	28
“taper”	0	3	13	7	23
“rouer des coups, etc”	3	1	5	4	13
“passer à tabac”	0	1	3	3	7

④多義語－速い意味変化 (24 個: bader, bartas, bougne, bougnette, bouléguer, cabourd, caraque, closque, croutet, embroncher, empéguer, escagasser, escamper, escoubilles, finter, gafet, gavach, pécaire, peillarot, peille, rabaler, ratoune, rondiner, tuster)

「多義的な単語」においては、「オクシタン語」の辞書と「フランシタンの語彙集」で載っている意味が異なる場合もあり、さらには「フランシタン」の語彙集にも載っていない回答が示された例も多い。これらの単語は、地元生まれの人と地元以外生まれの人とで知っている割合に開きが大きいことが特徴である(グラフ3 参照)。近年「オクシタン語」の辞書の編纂以外に「ここのことば(paroles d'ici)」の語彙集が数多く出版されているが、<sup>13)</sup>それは日常使用している単語が「オクシタン語」の意味とは異なる場合が多いからであろう。しかし、各地の語彙集の出版も、意味変化の速さと多様さに対応しきれないようである。

中には、最初は明らかに「間違い」であったであろう表現が、市民権を得ているのではないかと思われる意味変化もある。例えば bougne における “arabe” という意味は、その隠語的表現の «beur» と音

が類似していることから派生したことが推測される。また、*caraque* については (*Le Petit Robert* と *Alibert* で意味が異なるが、*Le Petit Robert* に表示された方の意味を記した人は1人しかいなかった)、*Alibert* やフランシタンの辞書で明記される“*gitan*”の意は、かなり軽蔑的な意味合いが強いため隠喩的に扱われることが多かったのか、「地元以外」においては“*gitan*”が影を潜め、“*mal habillé*”, “*mauvais*”, “*bête*” な人一般をしめすものに変化している。

このような隠喩的な意味が興味深い変化を示したものに、*gavach* がある。これもオクシタン語においては軽蔑的な意味合いの強い、「粗野な田舎者」を意味している。その後、平野に住む人にとって身近な「山の人」を指すようになり、「フランシタン」の語彙集においては、『ラングドック地方の人にとっては Massif Central に住む人、Aveyron の人にとっては Lozère に住む人』と、文脈依存的な意味が記されている。しかし、このような意味は十分に了解される環境を失い、「ラングドック地方の住民」「ベルピニャン、ナルボンヌ(どちらも南フランスの比較的大きな都市)の住民」など、まちがって了解されているほかに、「よそのもの」といった一般的な意味にも変化しつつある。

例2: ④の単語の意味の回答例 (出身地別の回答者の人数表)

*bougne*(59) - ALI(*bonha*): *bigne, bosse, enflure, tumeur*

FRL: (1) *tache* (2) *grosse bosse* (3) *choc, notamment dans un accident de voiture*

(4) *souche d'arbre*

<i>bougne</i>	外国人	不明	南仏	南仏以外	合計
“ <i>tache</i> ”	0	3	14	4	21
“ <i>arabe</i> ”	2	1	7	4	14
“ <i>visage</i> ”	0	0	7	3	10
“ <i>coup</i> ”	0	0	3	3	6

*caraque*(72) - ROB: *ancien navire de fort tonnage* ALI(*caraco*): *gitan*

FPO: *bohémien (péjoratif)*

FRL: *gitan*

<i>caraque</i>	外国人	不明	南仏	南仏以外	合計
“ <i>gitan</i> ”	0	7	23	7	37
“ <i>sale, mal habillé</i> ”	1	0	8	6	15
“ <i>mauvais, bête</i> ”	1	2	6	5	14
“ <i>ancienne locomotion</i> ”	0	0	1	1	2

*escagasser*(98) - ALI(*escagassar*): *fienter avec effort, affaïsser, écraser, aplatis, s'efforcer,....*

FPO: *écraser, aplatis complètement*

FRL: *abîmer, écraser*



escagasser	外国人	不明	南仏	南仏以外	合計
“abîmer, écraser”	0	2	30	14	46
“énerver qqn”	0	4	9	19	32

escamper(111) - ALI(escampar) : *répandre, verser, étendre, épancher, jeter, perdre...*

FPO: *jeter (principalement ce qui ne vaut rien)*

FRL: *jeter, répandre, éparpiller*

escamper	外国人	不明	南仏	南仏以外	合計
“jeter”	3	7	39	20	69
“partir, fuir”	2	2	4	13	21

gavach(31) - ALI(gavach): *goïnfre, goulu, rustre, grossier, montagnard, langage étranger, patois*

FPO(gabatch): (1) *habitant du Massif Central, pour ceux du Bas-Languedoc (péjoratif, méprisant),*

(2) *pour un Aveyronnais, c'est un Lozérien*

FRL: *habitant de l'Aveyron, du Tarn et de la Lozère pour les natifs du Bas-Languedoc*

gavach	外国人	不明	南仏	南仏以外	合計
“paysan”	1	2	6	0	9
“rustre”	0	0	6	0	6
“montagnard”	0	1	3	0	4
“étranger”	0	1	1	1	3
“chaussure”	0	0	2	0	2
“marginal”	0	0	0	1	1
“entre fada et narvalo”	0	0	0	1	1
“gitan”	0	0	0	1	1
“habitant du Languedoc”	0	0	1	0	1
“habitant de Perpignan ou Narbonne”	0	0	0	1	1

peillarot(17) - ALI(pelharòc, pelharoaire): *chiffonnier*

FPO(péillayre, péillarot): *chiffonnier,*

FRL: *chiffonnier*

peillarot	外国人	不明	南仏	南仏以外	合計
“chiffonnier”	0	2	3	1	6
“mal habillé”	0	1	3	0	4
“gitan, paysan”	0	0	2	2	4

ratoune(67) - ALI(raton): *petit rat, petite dent, terme de caresse de nourrices, homme qui met le nez partout*

(ratoneta) : *petite souris, dent d'enfant*

FPO: *dent de lait*

ratoune	外国人	不明	南仏	南仏以外	合計
“dent”	0	4	22	19	45
“dent de lait”	0	3	11	2	16

rondiner(31) - ALI(rondinar) : *murmurer, grogner, grommeler, geindre, se plaindre, bourdonner*

FRL: (1) *traîner dans un appartement, (2) rouspéter après qqn*

rondiner	外国人	不明	南仏	南仏以外	合計
“râler”	0	4	11	3	18
“être rond”	0	2	5	2	9
“errer”	0	0	1	2	3

### 3. おわりに

①②のようなカテゴリーの単語は、「日常のフランス語の中にオクシタン語が息づいている例」として分析することが可能である。このように「オクシタン語」と「フランス語」を「フランシタン」という言語接触の場において対比させることで、<一つの言語>としての「オクシタン語」を可視化・対象化するような記述は、「オクシタン語社会言語学」の目的に適っていると見える。しかし、そのような単語は全体の半分を占めるにすぎない。③のカテゴリーの単語のように「二つの言語」を分離して観察することが難しい単語も多く、④のカテゴリーの単語などのように、非常に流動的な意味変化のなかにおかれている例もある。

このように速い意味変化を生じさせる理由として、これらの単語については「オクシタン語の規範」が届かないということが考えられる。例えば、調査された単語を使用する人々は、オクシタン語の辞書、「フランシタン」の辞書に「今、ここで使用されるべき」意味が記載されてあるとはほとんど認識していないだろう。書かれたものがその「正しさ」を保証しない場合、ある単語の伝達される環境に不均衡が生じたとき、その単語の意味は流動的にならざるを得ない。

また、「少数言語」は、地元の文化に根付いているもので、その「伝統的な話者」が正誤判断の根拠を特権的に有しているとみなされがちであるが、現在のオクシタン語の状況は、地元の人々を「言語的不安(*insécurité linguistique*)」の状態においている。<sup>13)</sup> 彼らは自分たちの「バトワ」が「純粋なオクシタン語」ではないこと、またその一方で自分たちの話すフランス語も「正しいフランス語」からはずれていることを意識している。このような場合、ある単語が間違っただけの意味で使用されても、それを「訂正」するだけの根拠(=規範)が彼らにはないため、それが「新しい意味」としてそのまま流通・

定着しうることが考えられる。そして、単語を「間違っただけの意味」で使用してしまうのも、また、そこで生じた「新しい意味」を積極的に利用するのも、主に地元生まれではない人達であることが、アンケートの回答から推測される。むしろ、その単語を使用するにあたって決定的な役割を果たしているのは、「地元以外生まれ」の人々ともいえる。結びつきの強い社会ではことばの変化は起こりにくいが、結びつきが弱くなったとき、その弱い部分から変化が生じやすい。<sup>14)</sup>

そして、このように文法・話者・伝達範囲の定まらない、すなわち<一つの言語>の枠組みの届かないところにある意味の揺らぎこそ、「フランシタン」の「二つの言語」に分割されることのない側面である。これらの単語が記述からこぼれ落ちるほどの速い意味変化のもとで使用されていることは、オクシタン語という言語の側からすれば、その安定した文法体系どころか、単語の意味体系すら崩壊していくことを示し、それほど歓迎すべきことではないのかもしれない。しかし、意味変化をこうもってでも積極的に使おうとする表現、という意味で、「ここのことば」は重要で活発な役割を担っているともいえる。また、この揺らぎをおしとどめることができる限りにおいてのみ、<一つの言語>という枠組みが立ち上がるということ、すなわち、ことばの状態において<一つの言語>として言及できる部分は非常に限られたものだけだということが、「フランシタン」の状況から実感できる。「言語接触」を、ただ二つの言語に分割するためだけに設定するのではなく、不安定なゆらぎとしての言語接触そのものを対象化する方法論や視点をさらに精緻化していく必要があるといえるだろう。

## 註

<sup>1)</sup> Couderc, Y., 1974, “Francitan”, *Occitania passat e present* No.3. 参照。筆者は「フランシタン」という表現をフランス語とオクシタン語の接触形態のあらゆる段階をも含めた全体の総称として使用する。これらの接触の度合の分類とその名称についての問題は、Mazel, J., 1980, “Francitan et français d’oc. Problème de terminologie”, in *Lengas* No.7; Lafont, R., 1984, “Pour retrouver la diglossie”, in *Lengas* No.15; Boyer, H., 1988, “Le «francitan». Matériaux pour l’approche des représentations et fonctionnements sociolinguistiques d’un interlecte”, in *Lengas* No.23, p.90 など参照。

<sup>2)</sup> Gardy, P., 1988, “Pourquoi existe-t-il un texte francitan?” in *Lengas* No.23, p.128.

<sup>3)</sup> 「フランシタン」の対象化の歴史と「オクシタン語」という<一つの言語>の成立については、拙論『フランシタン(francitan)への考察—<一つの言語>の余白として』、『一橋論叢』, 1999年8月122巻第2号参照。

<sup>4)</sup> Gardy, P., 1977, “Le retour du francitan”, in *Lengas* No.1.

<sup>5)</sup> 「オクシタニストにとって認めるのは辛いことだったとしても、オクシタン語におけるディグロッシは、(もはや) そうであって欲しい状況ではなかった。」 Boyer, H., 1990, *Clés sociolinguistiques pour le “francitan”*, CRDP Montpellier, p.31.

<sup>6)</sup> Boyer, H., 1988, *ibid.*, p.72.

<sup>7)</sup> Lafont, R., 1997, "La diglossie en pays occitan ou le réel occulté", in *Quarante ans de sociolinguistique à la périphérie*, Harmattan, Paris.

<sup>8)</sup> オクシタン語とフランス語の境界線の曖昧さについては、Paris, G., 1880, *Les parlars de France* (lecture faite à la séance générale de clôture du Congrès des Sociétés Savantes), Paris, p. 8 ; Kloss, H., 1967, "Abstand languages and Ausbau languages", in *Anthropological Linguistics*, IX-vii, pp. 34-38 など参照。

<sup>9)</sup> Lafont, R., 1984, *ibid.*, など参照。

<sup>10)</sup> Boyer 氏が 1996 年にモンペリエ・ポールヴァレリー大学で行った sociolinguistique の講義で使用したテキスト(未刊行)を参照した。

<sup>11)</sup> 最近行われた、比較的広範な(ラングドック・ルシヨン地方において、1000 人規模)アンケート調査によれば(Gardy, P. / Hammel, E., 1994, *L'occitan en Languedoc-Roussillon*, Trabucaire, Perpinyà) 、オクシタン語は「農村」「低学歴」「老年層」「男性」においてより頻繁に使用されているという。これはオクシタン語に付されているステレオタイプをほぼなぞる結果であり、これらの話者においては「パトワ(patois)」と呼ばれるオクシタン語に対する羞恥心("vergonha")は根強い。しかし、今回のアンケート調査を行う過程では、一瞥して「ここのことば」についてであることは理解された一方で、そのことばに対する恥の意識は全くなく、非常に好意的にアンケートに協力してくれたことが印象的であった。このような意識の断絶は、さらなる調査と研究の対象になろう。

<sup>12)</sup> 本論文中で使用了語彙集以外に、Mazodier, P., 1996, *Paroles d'ici. Lexiques du francitan - ou français parlé - de la région alésienne*, Espace Sud, Montpellier ; Blanchet, Ph., 1995, *Les mots d'ici*, Edisud など。

<sup>13)</sup> Bavoux, C. (éd.), 1996, *Français régionaux et insécurité linguistique*, L'Harmattan.

<sup>14)</sup> Milroy, J., 1991, *Linguistic Variation and Change : On the Historical Sociolinguistics of English*, Oxford.